



鳥かご

10月12日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

10月12日のお話「鳥かご」

フランス帰りのお民さんは、めっぽう腕の立つふすま職人で、部屋にぴったりのふすまを仕立てることはもちろん、自ら絵を描いたり、修理することまでなんでもこなした。正統な伝統工芸のわざを受け継ぐお民さんの仕事っぷりを見る限り、隣町にさえ出たことがないんじゃないかというくらい根っからの土地の人に見えるが、実は海外生活の方が長いそうだからわからない。

でもだからといってお民さんのふすまがハイカラだとか、フランス風だとかいうことはちっともない。むしろ、徹底的に日本古来の味だと言っていい。お民さん自身が切れ長の目に瓜実顔という、典型的に和風な顔立ちで、バタくさは一切ない。それに日頃はいちいち海外生活のこともなんか素振りも見せないものだから、我々はお民さんを当たり前のご近所さんとして接している。

特別扱いされても困るだろうけどね。

そういうわけで、お民さんがフランスでどんなことをしていたか、実はちゃんと聞いたことがなかった。だからある日、リュック・ベッソンが撮影クルーを引き連れてお民さんのところにやってきたのには、心底びっくりしたし、村は開闢以来の大騒ぎになった。いくら田舎暮らしの我々だってリュック・ベッソンくらい知っている。というか名前くらいはわかる。

どこからどう見ても土着日本人だったはずのお民さんが、突然フランス語で喋り出しリュック・ベッソンとタメ口をきいている。いやフランス語だからタメ口かどうかわからないが、少なくとも見た感じはタメ口である。リュック、リュックと呼び捨てにしているようにも見える。我々の知っているお民さんが消えちまって、見たこともない女性が出現したみたいでとにかく言葉もない。

でもそんなところに電話がかかってくると、いつもの通りのお民さんがふすまの注文を受け付けたりしているので、もう何が何だかわからない。リュック、コマンタレブーかなんか言っていたのが、はいはい仏壇の部屋のあのふすまが破れたのね、明日の午前中はどうかしら、なんて電話に出て、電話を切るなり振り向いてアクスキュゼモワメルシボクーかなんか言うわけだ。

撮影クルーがカメラを回し始めたりするものだからお民さんの家の庭先に群がっていた我々はどよめいて身を乗り出す。するとお民さんがこっちを見て、「ほらほらあんたたち、リュックの作品に登場できるかもよ」なんて言うものだから、素っ頓狂な声を張り上げるお調子者も出てくる。するとリュック・ベッソンが何かを言って、お民さんが笑う。「そういう目立ち屋は編集でカットされちゃうんだって」

あぶねえ。声を張り上げないでよかった。

やがてお民さんは立ち上がると縁先を下り、庭の工房に向かう。リュック・ベッソンもぎぶとんから腰を上げ、つかかけをはいて工房に向かう。扉を開け放つとそこには立派なふすまがある。やっぱりとても和風なふすまだ。でもそこには洒落た釣り鐘形の鳥かごが描かれている。その中に鳥はいない。もう一枚のふすまには木の枝に止まったインコが1羽いて、ちょうど鳥かごを見つめているように見える。

撮影クルーが扉のあたりに集まるので少々中の様子が見えづらくなる。するとライトが入ってふすまのあたりがぱあっと明るくなる。何人かのスタッフが中に入り込みふすまの脇に立つ。リュック・ベッソンはカメラの脇でお民さんと何かを話し込んでいる。お民さんが何かを言って、リュック・ベッソンが大きくうなずき、ふすまの方に目をやる。その時、それが始まった。

インコが枝から飛び立って、鳥かごの中に入ったのだ。

インコは羽を広げ、飛び立つと一気に鳥かごの入り口につき、そこでちょっと休み、ぴよんと中に入ると止まり木の上で足踏みし、振り向くように向きを変えるとぴたりと動かなくなった。それは何枚ものふすまを使ったアニメーションだったことが後でわかるのだが、仕掛けを見せて貰った後でも我々は本当にインコが飛んだようにしか思えなかった。鳴き声が聞こえたという者もいた。

リュック・ベッソンは満足げにうなずきお民さんを抱きしめ、クルーを連れて帰っていった。でもその日以来、お民さんを見ると鳥かごとインコのことを考えずにはいられなくなってしまった。

お民さんは鳥かごの中のインコなのだろうか、鳥かごから外に出たいのだろうか。全くもって余計なお世話なんだろうけど、そんなことを考えてしまう。鳥かごの外で何を見てきたんだろうか。どうして鳥かごの中に戻ってきたんだろうか。そんなことを考えてしまうのだ。お民さん本人はちっとも鳥かごとじ込められている感じはしないんだけどね。

(「鳥かご」 ordered by izumi-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるのですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上げてまいりましょう。

鳥かご

<http://p.booklog.jp/book/35127>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35127>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35127>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.